

6月は現代の国際社会における諸問題を議論する日仏シンポジウムや講演会が毎週のようにパリ日本文化会館で開催されました。本号では、「自然は考えるのか?」と、同テーマにも関連性のある「発酵文化人類学」についてのシンポジウムと講演会を取り上げ、ご報告致します。

目次

1. シンポジウム「自然は考えるのか?」 2~9
人間を取り巻く環境は地球レベルで深刻な状況にあることから、人間と自然との関係を根本的に問い直そうとするシンポジウム。人類学や風土学、哲学、農学、海洋学など、30名近い諸分野の研究者が参加、人間と自然、生物、環境という一連の問題について学際的、間文化的に議論しました。6月8日(土)に開催。
2. 講演会「日本の発酵文化人類学」 10~11
発酵文化人類学者 小倉ヒラク氏による発酵文化の歴史と東西比較。発酵をキーワードにした日本の地域創生の可能性についての講演会。6月21日(金)に開催。

① シンポジウム「自然は考えるのか？」

2019年6月6(木)と7日(金)にパリのユネスコ本部で、8日(土)にパリ日本文化会館で「自然は考えるのか？」という少し風変わりなタイトルのシンポジウムが開催されました。

同シンポジウムはフランスの地理学者・東洋学者であるオーギュスタン・ベルクさんが提唱し、30名近い諸分野(人類学、風土学、哲学、仏教学、人間環境学、霊長類学、農学、海洋学、法学、美術史学等)の研究者が集い、人間と自然、生物、植物、それらの間の関係性、そして生命、環境という一連の問題について、間文化的、学際的議論を行いました。ベルクさんはパリ日本文化会館運営審議会の委員の一人で、昨年11月の運営審議会でもこうした講演会の開催の必要性を提言していました。今回はその提言が実現した形になりました。

また同シンポジウムは、国際花と緑の博覧会記念協会が協賛し、総合地球環境学研究所、京都大学、社会科学高等研究院(EHESS)、パリ国立高等鉱業学校(ENSMP)、そしてユネスコとパリ日本文化会館の共催により実施されたものです。

3日間の議論を通じて「自然は考えるのか？」という問いかけに対して、いろいろな専門分野の見地から発表や議論が展開されましたが、上記問いかけ自体に「自然は考える」という答えが既に内在されているように筆者には感じられました。②でご報告する小倉ヒラクさんによる講演「発酵文化人類学」もその問いかけに微生物の視点から答えているように思います。

自然を考えるにあたって、現実的には私たち人間中心に理解し、考えざるを得ないという、避けがたい「制約」はあるものの、マラルドさんが触れ、頼住さんが紹介した道元の「自他一如(じたいちによ)に代表される「共生」の考え方、あるいは阿部さんの紹介した日本人の自然観、山極さんが指摘したヒトと動物との魂のつながりや、ダッサンさんが説いた植物の「感性的知性」の存在と植物とのつながりを、現代社会において私たちはもっと意識して生きていく必要があると思いました。さもないと人類は自然からの思わぬしっぺ返しを受けることになるのではないのでしょうか。

パリ日本文化会館で開催したシンポジウムは第3部にあたりますが、その部分だけでは全体像をとらえにくいいため、ユネスコで行われた初日の第1部と二日目の第2部についても概要を分かる範囲でお伝えしたいと思います。非常に難解な内容で、正確にお伝えできているかどうかについては、正直自信ありません。時に理解不足で誤った解釈をしている可能性もあります。従い、文責はあくまでも筆者にあることを予めご了解いただければ幸いです。

第1部「風土と環境」

最初にオーギュスタン・ベルクさんが「自然は進化を考えているのか？」というタイトルで基調講演を行いました。ベルクさんは、新ダーウィン主義も今西錦司の反ダーウィン主義も進化を説明できないとした上で、風土的仮説によって進化の問題を説明することを提案しました。

○ENSMP リスク・危機研究センター ヨアン・モロー氏 (文化人類学)

ベルクさんの基調講演に対し、モローさんは自然と文化の区別は、世界の現実ではなく、世界を研究するために考えられた哲学的虚構の一つにすぎないとし、風土論 (mesology 生物環境学) もまた一つの選択肢であると応じました。

○京都大学基礎物理学研究所 村瀬雅俊准教授 (未来創生学)

西洋の科学研究の発展や近代技術の進歩にもかかわらず、「生きている自然とは何か？」という問いかけに我々は満足な答えを見出せないでいる。しかも私たちはその問題に取り組むにあたって西洋の伝統的思考法に根深く影響されている。

主体 (または自己) と客体 (または他者) という二項対立とそれに対応する演繹法によって、私たちは生物体系の微細なコンポーネントを特化し、同一条件の下で同一刺激に対する同一の反応を示すという再生産原則を追求してきた。この種の二分法的展望は、対立するものは互いに排他的で相反している、という仮定に立脚している。

これに対して東洋哲学に典型的な相互補完的展望は、対立するものは相互に排他的ではなく単に補完的であることを示唆している。西洋科学と東洋哲学を別のものとして考えるのではなく新たな統合が必要だということである。そうして初めて上述の長年の問題に取り組むことができる。生物組織は内外の環境双方から挑戦を受けているので無限の対立と衝突を経験している。それがまた進化と発展の駆動力となっているに違いない。生物体にアイデンティティを与えているのはそのような復元的なダイナミズムである。

○京都大学工学研究科 富田直秀さん (機械理工学、医療工学)

富田さんは美術生や工学生、医科大学、その他の分野の学生たちと協力して病院のための製品やシステムを開発するアート&テクノロジー協力について紹介しました。

工学生と美術生の間にはアプローチの違いがある。工学生は実地評価の前に対象をクリアにし対象を書き出そうとした。反対に、美術生はその場でほしいものを感じなければ対象を書き出そうとはしなかった。自然の手順は工学のそれとは異なり、構造ではなくシステムが最初にくる。

アート&テクノロジー協力は医療サービスやサービスシステムを含む人間関係開発のためにも応用されている。人間関係開発が真に役立つためには「これは本当にわれわれが欲していることなのか？」と問いかけることが必要である。

○京都大学アフリカ地域研究資料センター 重田眞義教授 (農学・文化人類学)

「人間と植物の関係は便宜的に、①人間による植物の認識、②人間による植物利用、③植物による人間の認識、④植物による人間利用という、4つに分類される。

「①は folk taxonomy (民間分類学) の研究で扱われてきた。②は古典的な民族植物学や経済植物学で、あとの③と④の反人類中心的観点は人間にとって理解が困難であるが、農業者と栽培植物のあいだに典型的に見られる互恵的關係は人間と植物の共生關係と呼ばれる。

「例えば、非裂開小麦は人間を種子分散の唯一の媒体として認識しているにちがいない。そのような認識は直接小麦の再生産の成功と関わりがある。こうした異種生物間の相互依存的な關係 (共生關係) は当事者の意図に関わらず存在しうると考えられる。」

○早稲田大学人間科学部 森岡正博教授 (哲学)

「自然が考えるのは不可能であると思われるが、人間のテクノロジーと合体した自然が、あたかも考えているようにふるまうことはできると信じる。人間のテクノロジーと自然について哲学的分析を進めている。」

○CNRS (フランス国立科学研究センター) エリーズ・ドゥムルネル氏 (文化人類学、生態環境学)

「労働分配、栽培条件の人工化、生産物の標準化といった第二次世界大戦後欧州諸国で展開された農業の近代化は、生物に単純なまなざし (un regard réducteur) を投げかける農業生産の産業的理想に立脚している。1980年代以降になると衛生面、環境面、経済面での多重危機とともに農業界でそうしたモデル批判が急速に強まっていき、2000年代になると、農業環境を保護し、種子の再適正化を要求するための農業組合ネットワークが組織され、標準化ではなく、地方の多様性が尊重されるようになった。」

○EHESS ピエール＝オリヴィエ・ディットゥマル助教授 (人類学および生物史)

「中世西欧キリスト教社会では類似主義と自然主義に属する2つの存在論の間で緊張關係があった。それは4世紀から18世紀を連続した時代空間として考え、自然観自体に強い進化を認めている。この長期間における自然と動物の表象の進化を分析するにあたり、民間伝承の研究資料や図像などの文献を再び紐解くことを推奨する。」

第2部「自然を表象する、語る」

総合地球環境学研究所の安成哲三所長と同研究所モンスーン気候学/気候変動専門家の阿部健一氏が開会の挨拶を述べた後、ノース・フロリダ大学のジョン・C・マラルド名誉教授が基調講演を行いました。

○ノース・フロリダ大学 ジョン・C・マラルド名誉教授（日本哲学）の基調講演

「自然は我々の内にあるか外にあるか？」という問いかけは、人間中心主義とヨーロッパ中心主義に捉えられている。一方、土着アメリカや東アジアの文化に根付いた、人間は自然から決して切り離せないという考え方が考慮に値する。

「後者は人間中心主義が環境危機を解決するための賢明かつ倫理的な神話ではないことを我々に告げている。自然が我々の外にあるか、我々人間と切り離されているかという質問は、意識が我々の内にだけあるかどうかという質問に還元できよう。その質問への答え、そして『自然は考えるのか？』という質問への答えを探すにはデイヴィッド・アブラムのビジョンや禅の哲学者道元、20世紀の哲学者西田幾多郎の見方に立ち戻る必要がある」

○京都大学文学研究科 上原麻有子教授（日本哲学）

上記基調講演を受けて、上原麻有子教授は、近代日本の哲学者西田幾多郎や三木清、中井正一らの技術哲学を紹介し、人間の身体は自然の技術が生み出したものであり、また物をつくる身体は技術的であると説きました。そして、「創造性を特徴とする彼らの技術哲学は、人間＝主体 vs 物/環境＝客体という固定した関係を超越、物/環境も主体となり人間を形成するという、相互的主客論理に依拠している」と述べました。

○総合地球環境学研究所 阿部健一教授

続いて、阿部健一教授は、日本人の自然観について語りました。

「日本人は豊かな自然から生活の糧を得てきた。自然は慈母のように優しい。一方、日本列島は自然災害が多い。自然は厳父のように峻烈である。日本人はこの両極端の自然のなかで生きてきた。そのような自然のなかで暮らしてきた日本人が、自然をどのように考えたのか。日本人は、自分たちが自然の一部であるとも、自分たちが自然を支配・所有するものとも思わなかった。自然は人が関わることによって豊かになる、と考えた。それはとりもなおさず人を豊かにすることでもあった。『里山』という発想や、日本の農業の根本にある考え方であり、『風土』という考えの背景にある考えでもある。しかし、現代の日本社会がそのような考えを踏襲しているかどうかは疑問視される。」

そのような状況下で、阿部教授は風土に依拠した「農業の多面的機能」に着目した世界農業遺産の活動を紹介し、今後の農業のあり方を提唱しました。

○京都大学アジア・アフリカ地域研究科 (ASAFAS) 山越言教授 (霊長類学)

「野生生活におけるアフリカの紛争は人間と自然の間ではなく、異なる人間の間にある。植民地主義が 20 世紀初頭からアフリカにおいて保護区を確立して以来、当局は厳格かつ強制的に自然を人間の「干渉」から隔離しようとしてきた。」

そのような自然と文化の二分法と野生保護をめぐる錯綜した紛争に打ち勝つために、山越教授は、アフリカの野生保護区の現実を観察し、アフリカの人類発生的風景の潜在力に焦点をあてたフィールドアプローチを試みました。

「ギニアの森林地域にあるボッサー村で、マノン族は村の周りに小さな聖なる森の一区画を保存してきた。そこは野生のチンパンジーが棲息していることでよく知られている。チンパンジー棲息地の核となっている聖なるガン丘陵の見晴らしは今日非常に『自然』に見えるが、丘を覆う森の位相の細部描写は地元民による様々なタイプのデザインを示唆している。森は大部族の祭礼場所やイニシエーション儀式的場所、森の精霊たちが祭られている場所、埋葬地など、異なった機能をもったより小規模の茂みから構成されている。

「この『幽霊の茂み』は最近チンパンジーの科学研究の集中的ターゲットになっており、また観光的魅力の場所ともなり、彼らの伝統や所得源になり、村の誇りである一方、新たな紛争の種にもなっている。

「ローカルな概念と自律を評価することをせずに、外から干渉することは、地方の発展や自然資源保護の目的とは関係なく不毛であろう。ローカルな概念と自律を評価するアプローチはアフリカの野生生活保護にとって一つのモデルとなりうる。」

○総合地球環境学研究所研究員 嶋田奈穂子氏 (思想生態学)

「日本の民俗学者・野本寛一さんは日本の地方で家を建てる際の習慣『地鎮祭』について、人々は新しい家を建てる前に一度敷地を自然に返さなければならないと述べている。彼らは古い家の跡地に蕪 (カブ) とそばを撒く。すると3日後に芽が生え始める。芽が出るとその敷地が自然に帰ったと人々は考える。

「野本さんは、それが地の魂への儀礼だという。これは神社研究における『土地の生命』に通じるものだ。『なぜ神社があるのか?』15年前私はその疑問を抱き、神社の土地の機能と意味について研究し始めた。私は日本人が長い間神社のような土地を守ってきた理由を知りたいと思った。

「私はフィールドワークを通じて、最初に祈り、次に境内の形状をスケッチし、神社の周りの土地を観察した。すると神社の立地の特徴が浮かんできた。私は 800 以上の神社を訪れた。この調査から私は神社の土地の誕生と変容 (性質と役割の変化)、死を観察した。そして私は日本人が土地の命と意志をみつめていることがわかった。自然は考えるのか? という問いに私は良い答えを持ち合わせないが、この調査から彼らに意志があることが理解できた。」

○京都大学文学研究科 平川佳世教授 (西洋美術史)

平川教授は、16世紀の「風景画」を例に、近世芸術作品には、自然が鑑賞者に能動的に働きかけ、人の生や神の御業についての瞑想へと誘うものがあるとし、自然と人間の関係について考察しました。

○東京大学仏教学 頼住光子教授 (道元研究者)

頼住教授は、道元の主著『正法眼蔵』を吟味し、道元の自然観を明らかにして、それが自然との「共生」を実現するための思想的基盤であると説きました。

「仏教には『空 - 縁起』という言葉があるが、これはあらゆるものが固定的な実態ではなく本質をもたない、即ち『空』であるが、それが他のさまざまなものとの関わり合いの中で、その時、その場で成立しているということを『縁起』という言葉で表している。

「自己は自己以外のあらゆるものとの関係の中で始めて自己となっているのであり、自己が成立することは他者が成立することでもある。すなわち自己と他者とは一体であるということができ、それを仏教の言葉では『自他一如 (じたいちにょ)』『相依 (そうえ)』という。『共生』とは、個々のばらばらな要素としてのももの同士が助け合うというようなことではない。もともと『自他一如』である基盤の上で、それを自覚しつつ行為することが『共生』の実現であるというのが道元の考え方である。」

○アルル国立高等写真学院 小野規氏 (写真家)

小野さんは2012年と2017年の2回のフィールドワークを通じ、その変容を撮影し、21世紀初頭の日本の海岸風景の芸術的視覚的資料を残しました。その写真「247日目から341日目の東北」(2011-2012)と「海岸のモチーフ」(2017-2018)を紹介しながら、人間と自然の相互作用の結果を示しました。一つは戦後の沿岸開発を一掃した津波後の状態。もう一つは新たな津波対策用防波堤の建設現場(高さ10-14m、全長400km)です。

そして言います。「2011年3月に東北地方沿岸部で起きた地震、津波、原発事故という三重の災害は、実際の風景だけでなく、日本人の自然、特に海洋との関係にドラスチックな変化をもたらしたように見える、それらの変化は先のできごとの生態環境学的、経済的、文明的な結果について我々を自問させずにはいない」と。

第3部「生物の感性的知」

○京都大学 山極壽一総長（人類学/霊長類学）の基調講演

山極さんは「世界の生物についての日本の概念」と題して講演しました。

「西田幾多郎も今西錦司も生物の本質は時間と空間、構造と機能、主体と客体の同期化によって特徴付けられると述べている。我々はそのことを肉体的にも精神的にも感じることはできるが、論理的には感じられない。生きるとは環境への能動的反応である。

「しかしながら、論理と言語に基づいた科学は世界を直線的な時間でもって空間的に認識するため、私たちに理解できるのは一部の自然だけにすぎない。近代科学は環境を制御するように我々を客観性に導く。そして急速な技術進歩は我々を惑星の範囲を超えて致命的な自然環境破壊へと導く。

「人類は猿との共通祖先から違う道に進み、フィクションを創造することで共同体のネットワークを拡大してきた。言語は文化の伝播に貢献し、我々は仮想世界に過度に依存したフィクションの中で生きている。

「しかし、自然と文化は、ベルクさんが指摘するように、分離されるものではなく、『風土』に統合されるべきものである。今西錦司は自然研究を還元主義的自然科学でなく、全体論的アプローチで行うべきとした。日本の文化はその両方に属す『間』という概念を作り出した。

「例えば『里山』は山林と村（平野）との間に位置し、両方に属している。それは人間も野生動物も受け入れ、どちらも除外しない。霊の転生は生きた世界と死後の世界を結びつけ、川や橋は通常『間』を構成する。人間と動物は同じ魂によって転身できると考えられている。

「こうした考え方は日本人にユニークな感情をはぐくみ、自然を管理するのではなく自然と共存するように導いた。我々は地球上の自然との調和のとれた関係を維持するためにそのような直感的観念を再検討すべきである。」

○EHESS フレデリック・ジュリアン准教授（人類学）

ジュリアン准教授は「生物間の知の分配をどう行うか？」と題し、猿や鯨や鳥やヒトを例にとって、いかに知性が分配されるか、について包括的にアプローチしました。包括的アプローチとは反省能力は持っているが言語はない生物と、自意識と言語のある人類の間で「何が起きているか」を分析するアプローチです。彼は、合理的、実際の、感覚的、感情的な異なった形の知性について述べ、それらが異種間でどう分配され、種間の視点から進化の歴史にどう影響しているかを述べました。

○ポリネシア航海協会 内野加奈子氏（海洋学/自然教育研究家）

「古代、ポリネシア人たちは数千キロの海を航海し、太平洋の島々を見出し、定住していった。彼らは星を羅針盤とし、海のうねりのパターンや、風、雲、天候の変化、野生動物などを注意深く観察することで、一切の計器を使わずに、外洋を自由に行き来することができた。1975年にホクレアという名の一艘の航海力ヌーが建造され、古代航海術が実践された。」

内野さんは、自らも参加したそのホクレア船での航海を辿りながら、常に変化する自然を読み取り、進路を見出す伝統航海術について紹介しました。

○CIRAD (フランス国際農業開発研究センター) ジャック・タッサン研究員 (植物生態学)

ジャック・タッサンさんは「樹木あるいは感受性の強い生命」と題して講演しました。

まず樹木の知性を人間のはかりで判断できるのか?という根本的な問いかけから始め、植物は「感性的知性」とでも呼ぶべき「そうと意識しない知性」を持っているのではないかと推論しました。

「樹木は森のバイオマス (生物量) の 99.7% を占めている。人間のように知性を有していなくとも生物界で最大の位置を占めることができることを示している。マイケル・マーダーという哲学者は、樹木は大地に根を張っているだけでなく、彼らの環境全体、宇宙そのものと交感しているのではないかと、とも言っている。

「植物は表面で外界と接している。葉は表面そのものであるし、幹や根も生きている部分は周辺部の表面部分であり、真ん中は死んだ木質である。樹木が表面で生きているということは、感受性があるということではないか。

「樹木は外界との関わりが実に活発である。進化の過程であらゆる外の生物と驚くべき協力関係を築いてきた。自分ではできない生物的機能を他者に委ねてきた。花粉を虫に運んでもらったり、種を鳥に蒔いてもらったり、根粒や菌根の形成を通じて自分では届かない栄養分を吸収したり、など。

「樹木は草木と異なりゲータが名づけた『芽連盟』というようなものを形成する。芽は樹木を構成する真の個体とみなせるものである。樹木はむしろ複数の実体である。この『脱個体』があまりにも徹底しているので、最近の研究では、大樹の場合、全遺伝形質が枝々で異なっていることが明かされた。

「樹木の感受性を承認してはじめて感受性の概念を発展させ、樹木の力を認識することができる。植物の知性の公準を置くことができるのはその意味においてである。樹木はその環境を考えないが、環境に適応し、環境を作り、環境に溶け込む。

「樹木は重力の方向を知っている。彼らの感受性のみを通じて、強風時の枝の適切な位置づけさえも、あるいは彼ら自身の質量による力さえも知っている。樹木の生長はその重力の認識と自己の認識によって導かれ、まっすぐに伸びることができる。

「植物が光に感じやすいことはよく知られている。その感光性はすべての細胞に存在する。人間の網膜には光受容体が 4 つしかないが、植物の細胞には 12 もある。植物には成長を導く力があり、光とリズムを刻みながら、花の時期を決定する。

「植物は虫に著しく敏感である。ダーウィンはハエトリグサのような食虫植物を観察してそう考えたが、それはすべての植物にあてはまることである。一枚の葉は侵入者が誰かを、少なくともその唾を認識することができる。さらにはその侵入者を捕食する虫が認識できるガス状の物質を放出することさえある。



講演中のタッサン氏（右は司会を務めたモロー氏）

「従って樹木は非常に感性を備えているといえる。むしろ知性を備えているといってもよい。実際そうした方法で彼らは複雑な場に見事に順応しているのだ。

「毎年 1300 万もの森林を失っているほどに我々は樹木を邪険に扱っている。もう一度樹木の『良い知性』について問い直す必要がある。私たちの手は霊長類の進化の過程で樹木によって作られてきたといってもよく、植物との関係は人類初期からのものである。人間の体質は樹木のそれに固有のものである。私たちには樹木の痕跡がある。

「真に自由に樹木を眺めれば、樹木とのつながりが我々の中に蘇ってくるのが感じられるであろう。樹木は考えないので、彼らのあり方から示唆を受けることにより、我々の知性によって我々の環境から抜け出すことができよう。『樹木のように考える』と書いたのはその意味においてである。

○CNRS (フランス国立科学研究センター)・EHESS プリグ・ピトゥルー研究員 (社会人類学)

ピトゥルーさんは、メキシコの先住民を例にとり、その儀式等から人間と非人間との相互作用について語りました。彼によれば、「アメリカ大陸先住民は犠牲となる鶏を供え、山や大地や太陽や風に助けを求める際、『生かしてくれている者』《He, Who Makes Being Alive》という呼びかけをする。そこでは、神への御供えは人間と非人間の間の協働の確立のための作業としてとらえられている。」

② 講演会「日本の発酵文化人類学」

2019年6月21日(金)には日本で唯一の発酵文化人類学者である小倉ヒラクさんを招いて「日本の発酵文化人類学」について講演していただきました。同名の著作も刊行されています。

小倉さんは日本中に存在する発酵食品を実際に見歩きながら、各地で実践と理論を通して発酵文化を広めようとしている行動派の学者です。前週に日本から来たロバート・キャンベルさんも、数学を主題とした思索、執筆、講演活動をしている「独立研究者」の森田真生さんも小倉さんと親しく交流していると聞きました。

小倉さんは常々「微生物が人間を生かしている、微生物が世界を動かしている」と言っています。その意味で先に報告させて頂いた「自然は考えるのか？」という議論に加わって論じて頂いてもよかったですのではないかと思います。

さて、小倉さんは発酵文化を説明するのにまず「酉」や「酒」、「醸」といった漢字の語源から語り始めました。そして日本では死は再生を意味し、夜中の森に現れる鳥や動物たちは霊の化身であると信じられたという話をしました。

また、発酵技術は神代から知られていて、「国稚く、浮脂の如くして、くらげなす、ただよへるものに、葦芽の如、萌あがるものに、困りて成りませる神の御名は、ウマシ、アシカビ、ヒコジの神。」という『古事記』に記された言葉を紹介しました。古(いにしえ)から、神が微生物を刺激して萌えあがるものにする、という風に伝えられているのです。

また「田」という漢字を引き合いに、自然は曲線でできているが、田は直線でできている。これは田が人間の手によって人工的に開拓されたことを示している、とも。

生態系が異なれば文化も異なる。西欧は小麦とブドウの文化、東洋は米と酒の文化。稲作は収穫率が改良されて稲作文化を育て、肉を食べる文化は、肉牛を育てるのに飼料穀物である小麦や水を多く使う。各地に伝わるタブーは宗教や政治から生まれる場合より、自然環境から生まれる場合が多い。インドで牛肉を食べない習慣は、乾燥し土地が痩せているインドでは、牛肉を食べてしまうと水や飼料が不足して牛を再生産していくことが困難になるからという側面がある。

微生物も気候から生まれた。レヴィストロースは「発酵は気候と微生物のブリコラージュである」と言った。だから文化を育てたのは気候と微生物だと言ってもよい。人間にとって有益な微生物は発酵菌と呼ばれ、有害な微生物は黴菌と呼ばれる。腐敗と発酵は紙一重の違いである。

発酵食品の利点は、腐らずに保存が利く、栄養分が増す、味がよくなる、という点。パン、グラデシュから東はモンスーン気候で湿気が多く、味噌、酒、紹興酒などの発酵食品が、同西はパン、ヨーグルト、ワイン/ビールなどの発酵食品が生まれた。

発酵は蘇生である。痩せた土地が蘇る。分断されたコミュニティが蘇る。水と土地が蘇る。微生物は目に見えないが仕事をし、分離した人間関係を再び結びつける。酒造りは土地を蘇らせる。発酵文化は過去のものではない！新しい世代がどんどん発酵文化に魅せられ引き寄せられている。発酵文化は豊かさの再定義である。

小倉さんは今年4月から7月まで渋谷で「発酵から再発見する日本の旅」という展覧会を開催しました。また『日本発酵紀行』という本も出版しました。日本の47都道府県には他県とダブることなく1県に最低1つの発酵食品が存在する、と地図で示し、発酵を通じた地域起こしを提唱しました。



講演中の小倉ヒラク氏

そして小倉さんは次のような感動的な文章を読んで講演会を終えました。

「暮らしのなかの暗さに目を凝らそう。そこには過去から命をつないできた、忘れられた存在の、忘れられた小さな声、小さな光が瞬いている。耳を傾けて、思い出そう。まだまだ過去とのつながりは断ち切れられていない。過去とつながっているということは、未来への道があるということだ。発酵は日本人々がどのように生きてきたかの歴史。そしてこの国で僕たちがどのように生きるかの未来。記憶の箱舟であり、未来へ進むための船だ。」

以上